

知識の翻訳・生産と身体政治

——中国初の西洋産婦人科専門書『婦嬰新説』を中心に——

姚

毅

【要約】 本稿はイギリスの宣教医であるホブソンの「西医五種」の一冊であり、中国初の西洋産婦人科専門書である『婦嬰新説』を取り上げ、それが何を如何に伝え、如何なる知識体系を構築し、当時の中国に如何に受けとめられたかをジェンダー視点から検討する。西洋医学の伝播と受容についてはすでに多くの研究があり、それらの研究は、従来の西洋医学の衝撃と中国知識人の対応のほかに、近年では、知識の翻訳・生産及び社会化過程における適応・交渉という視点、さらには、中西医学の知識及びそれに絡む身体観などの視点からの研究が増えつつある。本稿もこうした視点を受け継ぎ、まず『婦嬰新説』が西洋医学の先進的と思われる医療器具や手術を翻訳しなかったことを突き止め、ついで『婦嬰新説』には医学知識の外に、西洋近代的身體・ジェンダー観及び道徳・神学などの内容も多く含まれていたことを指摘し、さらに『婦嬰新説』は刊行後、それほど「衝撃」的なものと受け止められていなかった原因を分析し、『婦嬰新説』の翻訳と伝播を文明の覇権をめぐる身体政治から考察する。

史林 一〇四卷一号 二〇二二年一月

はじめに

『婦嬰新説』はイギリスの宣教医であるホブソンが撰述した、中国初の西洋産婦人科専門書であり、「中西医折衷論」の典型と言われている。ホブソンは有名な『全体新論』（一八五二）に続き、『博物新編』（一八五五）、『西医略論』（一八五七）、『婦嬰新説』（一八五八）、『内科新説』（一八五八）という、いわゆる「ホブソン西医五種」を世に送り出し、その解剖

学に基づく近代西洋医学と人体生理知識が中国に大きな衝撃を与えた。^① 人体知識、特に生殖系統の構造と機能の認識は、病気の治療だけでなく、身体観や生命観、ジェンダー観などに拘わる事柄でもあり、文化衝突の結節点に成りうる。そのため、初の西洋近代医学書となる「ホブソン西医五種」は、東西文明の衝突、西洋文明の受容過程などを観察する典型的ケースとして注目され研究されている。それらの研究は、従来の西洋医学の衝撃と中国知識人の対応、中国医学と西洋医学（以下は中西医结合と記す）の優劣を論じる研究の外に、近年では、知識の翻訳・生産及び社会化過程における適応、調整、交渉という視点、さらには、中西医结合の知識及びそれに絡む身体観などの視点からの研究が増えつつある。^② しかし、こうした研究の多くは、その一冊目である『全体新論』、或は一括りの「ホブソン西医五種」に集中し、『婦嬰新説』についての本格的研究は管見の限り皆無に等しい。^③ このような現状に鑑み、本稿は『婦嬰新説』の撰述過程と内容を中心に、『婦嬰新説』が何を如何に伝え、如何なる知識体系を構築し、当時の中国で如何に受けとめられたかに焦点を当て、ジェンダー視点から検討する。

中国では「女科」と呼ばれる発達した産婦人科分野が存在し、「胎産書」と呼ばれる産婦人科著作が豊富に存在していた（以下は胎産書と記す）。また「男女隔離」の規範などから分娩は産婆が主導し、男性医者が積極的に介入しなかった。しかし、それらの伝統知識や慣習は宣教医に根底から批判され否定された。宣教医は西洋の産婦人科知識の優越性と権威性を主張し、その知識を熱心に伝授すると同時に、それを布教の打開策として画策し、力を傾注していた。西洋産婦人科知識は現在では一つの優れた知識体系として普遍的に認知されているが、十九世紀中葉に、少なくとも中国においては、その優位性が殆ど認められておらず、二十世紀初頭まで西洋医学で唯一の受容に失敗した分野と言われるほどだった。^④

こうして見ると、中国と西洋の産婦人科とは、如何に「母子の生命を救済するか」を巡ってそれぞれが出した処方箋だという考えもありうる。『婦嬰新説』の翻訳と伝播・受容は、この二つの根本的に異なる処方箋が衝突し、女性の身体という場で展開され、繰り広げられた最初の一コマと見ることもできよう。近代西洋の産婦人科は、一夫一婦を理想とする

近代家族の形成と資本主義体制の成立、そして（男性）産婦人科医の登場に伴って現れ、帝国主義拡張の只中に中国に輸入されたのであり、それを伝播する宣教医の行為の持つ意味は複雑になる。本稿は、このような背景も考慮に入れ、文明の覇権をめぐるジェンダー戦略・身体政治という視点から『婦嬰新説』を再考してみる。

具体的構成は以下である。第一に、『婦嬰新説』は訳述の性格が強い。どの原著を参考にし、如何なる思惑で取捨選択をしたかを明らかにする。第二に、『婦嬰新説』の内容と特徴をまとめ、十九世紀半ばのヨーロッパの医療及び身体観、ジェンダー観に目を配りながら、その意味を解説する。第三に、『婦嬰新説』の中に散らばる身体・性別・人種・道徳・宗教などの言説を洗い出し、ホブソンの医学世界を描き出す。第四に、『婦嬰新説』が如何に受け止められていたかをほぼ同時期の胎産書と比較しながら考察する。

- ① 範行華『中国医学史略』北京、中医古籍出版社、一九八六年。鄧鉄濤『中医近代史』広州、広東高等教育出版社、一九九九年。ホブソンの著作は中国のみならず、日本でも注目され、それらが刊行されて間もなく、いずれも日本で訓点翻刻されて、広く読まれた。詳細は吉田寅「中国キリスト教初期医療伝道史研究」・ホブソン著中国語医学書の「考察」『立正大学文学部紀要』第二号、一九九六年を参照。

- ② 胡成「西洋医生与華人医業——以在華基督教醫療傳教士為中心」（一八二五—一九一六）中央研究院歷史語言研究所集刊第八十三本、第三分、二〇一二年九月、五七—六〇六頁。高晞「德貞伝——一個英国伝教士与晚清医学近代化」上海、復旦大学出版社、二〇〇九年。陶飛亞「伝教士中医觀の変遷」『歴史研究』二〇一〇年五期、六〇—七八頁。李尚仁「晚清来華の西医」生命医療史研究室主編『中国史新論——医療史分冊』台北、聯経出版事業公司、二〇一五年。董少新『形神之

- 間・早期西洋医学入華史稿』上海、上海古籍出版社、二〇〇八年。陳万成・羅婉薇・鄭詠衡「晚清西医学的訳述——以『西医略論』、『婦嬰新説』兩個稿本為例」『中国文化研究所學報』五六期、二〇一三年一月。姜鍾赫「東亜『病婦』——清末西医療科在広州和香港の發展」『中央研究院近代史研究集刊』一〇七期、二〇二〇年三月。吳義雄「晚清時期西方人体生理知識在華傳播与本土化」『中山大學學報（社会科学版）』二〇〇九年三期。楊念群「再造・病人——中西医衝突下的空間政治（一八三二—一九八五）」北京、中国人民大学出版社、二〇〇六年。
- ③ 陳万成・羅婉薇・鄭詠衡（前掲論文）の優れた研究があるが、『婦嬰新説』はその一部にすぎないだけでなく、翻訳を中心とする研究であり、筆者の問題関心と異なる。

- ④ 姜鍾赫、前掲論文。

一 『婦嬰新説』の撰述及び時代背景

(一) 明末清初の解剖学の導入

人体知識・生殖系統の構造と機能に関する西洋の解剖学知識は、既に明末清初に來華したイエズス会修道士により導入された。『泰西人身説概』^②、『人身図説』^③などの漢訳洋書の他に、ブーヴエ、パルナンが満州語で編訳した『欽定格体全録』^④があり、これらの著作は凡そヨーロッパ十六世紀以来の解剖学的成果を反映している。例えば、『人身図説』に、「論男女内外陰及辜丸並血脈二絡」「論辜丸曲折之絡与激發之絡」「論女人子宮」「論子宮包衣胚胎胎絡」等生殖の構造と機能を論じる章がある。そこによく見られる「質具」という語は、男性の精液或は女性の経血を指す語であり、これと関連する「質具絡」は、生殖器の動脈と静脈の総称であり、また「激發之絡」の語は、男性の輸精管或は女性の輸卵管を指す語である。^⑤つまり生殖器官は男女がほぼ同じ名称で呼ばれていたのである。子宮は女性だけが持つものであるが、「辜丸」は男女とも持つており、「男子の辜丸は外にぶら下がり、女子のそれは内に蔵している」だけだと認識していた。こうした身体観は、当時のヨーロッパで固く信じられていた、「男女は生殖器官においては本質的な違いがない」という男女の相似性論に基づくもので、それがそのまま中国に持ち込まれたのである。^⑦また『人身図説』のイラストは数が少ないだけでなく、中国医書の経脈図とほぼ同様に、身体器官の凡その位置を示すだけで、男女の外陰部をリアルに描いた図が一枚もなかった。

宣教医による漢訳医書の第二波は、それから約二〇〇年後のホブソンの『全体新論』から始まる。『全体新論』に産婦人科に関する知識を論じる「陰経」「胎論」「胎盤論」「乳論」「月水論」の五章があり、それに続く「造化論」「靈魂妙用論」の二章が専らキリスト教の解説及び信仰の勧めに充てられている。注目すべきなのは、骨格図や内臓断面図などの精

細な図版であり、「正面人骨図」「嬰孩骨骼図」「週身腦氣筋図」などの諸図版は、中国医学界に、西洋近代医学の特徴を印象付けたものと思われる。同時に注目すべきなのは、上帝・造化主・聖書・靈魂などに説き及んでいる箇所が、約三十にも達しており、医学書兼布教書であった性格を象徴的に示している。『全体新論』は一連の新しい訳語の創出と共に、『人身図説』と異なる新しい解剖知識を齎した。例えば、「陽精」「精」はもはや『人身図説』の中の男女とも持つ「質具」ではなく、顕微鏡でしか見られない「形状は蝌蚪のようで、尻尾は長く、泳ぐのが非常に速い（状若蝌蚪而尾長游行甚疾）」という「動く物」、即ち精子のことで、女子の体内の「精珠」は、卵子のことである。また、「陽精」と「精珠」が結合して受胎する、と受精・受胎についても論じている。本稿で取り上げる『婦嬰新説』は、『全体新論』の七年後に刊行され、生殖に関する主な用語や論点、特に解剖学的・胎発生学的記述は『全体新論』を踏襲しているが、『全体新論』にない病症と治療法が中心になり、またキリスト教的色彩が大分薄れている。

「ホブソン西医五種」以降、特に一八八〇年代以降、産婦人科も含む多くの西洋医学書が翻訳紹介され、一つのブームを形成した。その中で最も有名なのは、オズグッド (Dauphin William Osgood、柯為良、一八四五―一八八〇) の『全体闡微』(一八八一)とダジュン (John Dudgeon、徳貞、一八三七―一九〇二) の『全体通考』(一八八六)と言える。産婦人科に関する専門書で、まず挙げられるのが、一八八九年刊行の五巻本『婦科精蘊図説』(博済医局刻本)であろう。この本は博済医院に招聘された宣教医トムソン (Joseph Thomson) とアメリカ人宣教医カー (John Glasgow Kerr、嘉約翰、一八二四―一九〇二) が、アメリカ人トーマス (Theodore Gaillard Thomas、安瑪氏) の *A Practical Treatise on the Diseases of Women* を訳したもので、四六章からなる大著である。^⑧ 王韜が『泰西著述考』で、「胎産については尤も詳細である。その部位の考察は、中医と相互に参考になり、西洋産婦人科の書で、此に勝る者は無い」と『婦嬰新説』よりも高く評価している。^⑨ その他に、一八九三年の同じく博済医局刊行の『胎産拳要』二巻、^⑩ 及び翌年一八九四年の『児科撮要』二巻があり、いずれも北洋医学館卒業の尹文楷が訳したものである。^⑪ 前者は、アメリカ人アシュトン (William Ashron) の *Essentials of*

Obstetrics を訳したもので、女性の生殖原理に関する解剖図五七枚を取り入れた。¹²⁾ 後者は、原著者情報がないが、複数の本を参考にして訳したと見られる。¹³⁾ さらに教科書として、一八九七年劉廷楨とメイが訳した『西医産科心法』がある。¹⁴⁾

人体生理知識や解剖知識は中国人の伝統観念と激しく衝突するため、保守的な人はもちろんのこと、中西医折衷派の大家である唐容川（一八五一―一九〇八）のような人でさえ、「以術殺人」「世之大患」と否定している。¹⁵⁾ また薛福成（一八三八―一八九四）のような開明的な外交家でもこれを厳しく批判している。薛福成は『出使英法義比四国日記』の続編に、倫敦博物館の人体骨格標本を見学した後の感想を次のように書き残している。「拙なるや、西医。中国の良医、亦た能く人の竅穴脈絡を知り、而して百に一失なし。然れども、必ずしも親ら諸（竅穴脈絡）を死人に験さず、亦た嘗て此の惨酷の事を為さず。忍なるや、西人」。¹⁶⁾ 中国医学は「残忍な」解剖や死体検視に頼らなくても治療ができ、医術が優れているというこのような批判の仕方は、十九世紀末に広く見られるようになる。後述するように、ホブソン医学書の時代にはまだそれほど激しい批判はなかった。

（二）『婦嬰新説』の撰述

まずホブソンの生涯について簡単に紹介しておこう。¹⁷⁾ ホブソンは一八一六年一月二日、イギリスのウェルフォードで生まれ、ロンドン大学医科大学を卒業後、ロンドン伝道会宣教医となった。一八三九年七月二八日、夫人とともに中国に渡り、十二月十八日マカオに着いた後、病院などで医療活動に従事した。一八五六年十月アロー号事件の際に戦火を避けて一時香港に遷ったが、上海の友人のすすめにより、翌年二月上海に行き、一八五九年まで同地の病院で働き、同年初め帰国。一八七三年二月十六日、ロンドン郊外で生涯を閉じた。ホブソンの中国語著作は十八種に及び、医学・自然科学関係の外、大半はキリスト教関係の著作である。また前述した『全体新論』のような医学書にも、キリスト教の賛美、それへのすすめが随所に含まれ、大変敬虔なキリスト教信者である。中国の医書を渉猟したホブソンは、中国に理解があると一

般的に評価されている。¹⁸⁾

『全体新説』は陳修堂の協力を得ていたが、『西医略論』『婦嬰新説』『内科新説』の三冊はいずれも管茂材との共著で、上海仁濟医館より刊行された。管茂材はまた管茂才とも書き、本名管嗣復、字は小異。彼については不明な所が多いが、葉廷珪によると、江寧の出身で、一八六〇年に亡くなった。父管同は桐城派の大家姚鼐の門下であり、管茂材自身にも詩文の作があるが、散逸したという。¹⁹⁾一八五八年に書かれた文書によるとホブソンはエドキンズ (Joseph Edkins、艾約瑟、一八二三―一九〇五) の推薦で管茂材を知った。

In the preparation of this work, the author has been particularly fortunate in meeting with a native scholar possessing particular qualifications for the task he had to perform.……He is a Nanking refugee, and was kindly recommended by the Rev. J. Edkins, who accidentally met with him at Soo — chow, a few months ago.²⁰⁾

この経緯は上記の葉廷珪や王韜も述べている。²¹⁾「際立つた資質」(particular qualifications)については明言していないが、『内科新説』の序でホブソンは、「最近上海に来て、華友の管茂才が医学を喜んで談じていることから、遂に彼と相談し、さらに『西医略論』、『婦嬰新説』及び『内科新説』の三書を著した」と述べている。²²⁾また別の文章には、“a very intelligent Chinese Physician”とある。²³⁾さらに管茂材とホブソンの両方と交流のあった王韜も、管茂材が「医学を好む(雅好岐黄術)²⁴⁾」と書いていることから、管氏が中国医学に詳しい学者であることは間違いないだろう。²⁵⁾しかし、肝心な『婦嬰新説』の翻訳プロセスや役割分担についてはいずれも言及しなかった。数少ない史料の中で注目すべきなのは王韜の日記である。そこには、ホブソンの帰国後、ブリッジマン (Elijah Coleman Bridgman、裨治文、一八〇一―一八六一) が管氏を招き聖書を訳させようとしたが、管氏は聖書が儒教に大いに背くものだと考え辞退したこと、また管氏が、安い賃金でホブソ

ンに雇われたことで友人から「屈節」と蔑み罵られ、その苦悩を王韜に吐露していたこと、さらに管氏が、自分は西学を求めるために墨海書館に入ったのであり「屈節」ではない、と友人に釈明していたことなどが記されている。²⁶こうした記述から、管氏は儒教に背くキリスト教に強い抵抗感があり、屈辱さえ感じていたことが窺い知れる。当時太平天国の乱のために難民になった管氏には、ホブソンへの協力を生活のためと割り切った部分があっただろうが、ホブソンの中国医学への非難をどう受け止めたか、それが翻訳に如何なる影響を与えたか、なかなか興味深い。陳万成らが、管氏が翻訳過程で中国の伝統医学に適合するよう働きかけたことから、二人の関係は“Cooperative Conflict”（協力的衝突）だったと分析しているが、推測の部分が大きいという印象が否めない。²⁷

なお、『婦嬰新説』については、「撰述」「訳述」「漢訳書」などの語で言い表されているが、基本的に十九世紀半ばの西洋医学書を選択的に訳し、編成したものと見てよい。当時の漢訳書の一般的なスタイルは、西洋人が内容を解説し、中国人がその理解した内容を中国語で書下ろし加筆する、というようなものだった。²⁸『全体新論』の序によると、『全体新論』は「鉸連の骨格及び紙人形」を用いて説明し、二人で相談して書いた。『婦嬰新説』も恐らく同様の方法ではないかと推測する。

『婦嬰新説』が参考にした原作については、一八五九年の *Medical Times & Gazette* 誌にあるホブソン訳者の書評から知ることができる。

Another treatise was on Midwifery, including puerperal diseases and infantile affections. This is mainly a translation of Churchills and Ramsbotham's works.²⁹

と、主にチャーチル及びラムズボサムの著書から訳したと明らかにしている。ラムズボサムは、Francis Henry

Ramsbotham のことだ、彼も当時の産婦人科名医である。³⁰⁾二年後の一八六一年、ホブソンは、「ホブソン 西医五種」の原著に触れ、『婦嬰新説』は「Dr. Churchill's Midwifery」を参考にしたと言及している。³¹⁾この二つの言及から、『婦嬰新説』はチャーチル (F. Churchill) の『On the Theory and Practice of Midwifery』を主とし、取捨選択して撰述されたことはほぼ間違いない。

チャーチルの *On the Theory and Practice of Midwifery* は一八四三年に刊行され、その後多くの版を重ね、ヨーロッパやアメリカに広く伝わっていた。US National Library of Medicine Digital Collections が所蔵する各版を見る限り、版を重ねる度に、図版も増えていったことが確認できる。³²⁾どの版も、各名医が開発し所蔵している、難産解決のためのピンセット、鉗子や針などの医療器具を紹介し、使用法を図入りで説明している。³⁴⁾『婦嬰新説』でも言及される会陰切開とその縫合を紹介する図もあった。³⁵⁾

『婦嬰新説』とチャーチル原著との大きな違いは、原著の内容が大幅に削減され、図版も原著のほぼ三分の一に留まり、ピンセット、鉗子などの医療器具を紹介する文も図も全て削除された点にある。また、原著では「器官」、「細胞組織」というような術語が頻繁に使われ、病気の形成原理が詳細に説明されているが、それらも全て省かれた。こうした取捨選択は、平易さを重視するホブソンの工夫であったが、後述するように、中国人に配慮した意図的な選択でもあったことを強調すべきだろう。このように、『婦嬰新説』はホブソンの取捨選択と管茂材の漢訳という二重のフィルタールのかかった「再創作」であると言える。ホブソンは一貫してキリスト教を固く信じ、中国医学を根底から軽蔑し否定している。このような立場に立つホブソンと、雇われる身であり、儒教を信じる管茂材との協働関係が注目されるところであるが、本稿はそれを重点的に論じる余裕がなく、幾つかの例をその都度指摘するに止める。

① 「解剖」「解剖学」の語源については、徐克偉『「解剖」「解剖学」について——近代中日解剖学術語の訳出と確立』『東アジア文化交渉研

究』十卷、二〇一七年三月、二九九—三二七頁を参照。牛亜華『「泰西人身説概」与「人身図説」研究』『自然科学史研究』二五卷一期、

二〇〇六年、五〇～六五頁。

- ② 鄧玉函訳、一六四三年畢拱辰によって整理刊行。鄧玉函（シュレック、Johann Schreck、一五七六～一六三〇）はドイツの学者、イエズス会修道士。明末に中国に赴任。『遠西奇器図説録最』（一六二七年刊）で知られている。

- ③ 羅雅谷・龍華民・鄧玉函訳。羅雅谷（ロー、Jacobus Rho、一五九三～一六三八）はイタリア人、一六二三年来華。龍華民（Nicolas Longobardi、一五九九～一六五四）はイタリアのイエズス会修道士、マテオ・リッチを継いで、イエズス会の中国宣教会長をつとめた。

- ④ ブーヴェ（P. Joachim Bouvet、白晋、一六五六～一七三〇）、パルナン（Dominicus Parrenin、巴多明、一六六五～一七四一）が康熙帝の要求に応じて訳した。

- ⑤ 漢文解剖学の書籍及び中国国内の関連研究について、以下を参照。牛亜華、前掲論文、五〇～六五頁。唐樞『從『造化機論』到『培種之道』：通俗性科学在清末中国社会学的傳播』、『近代中国婦女史研究』二七期、二〇一六年六月。

- ⑥ 範行準著、牛亜華校注『明季西洋伝入之医学』上海、上海人民出版社、二〇一二年、九七頁、一一四～一六頁。

- ⑦ これに関しては、董少新が詳しい分析を行った。董少新、前掲書、三四四～三四五頁。

- ⑧ 妥瑪氏著、嘉約翰・孔繼良訳『婦科精蘊図説』広州、羊城博濟医局、一八八九年。原作は一八八〇年アメリカで刊行。

- ⑨ 王韜・顧燮光「ほか」編『泰西著述考』（『近代訳書目』北京、北京図書館出版社、二〇〇三年、一～二四頁）。

- ⑩ 王韜『泰西著述考』、前掲書。

- ⑪ 尹文楷（尹端模）は『医学書五冊』と称する医学書を訳し、それが『割症全書』、『医理略述』、『病理撮要』、『胎產拳要』、『兒科撮要』で

ある。浩然「尹文楷医学湛深名不虛伝」『基督教週報』、二四四八期、二〇一一年七月二四日。また、尹文楷は孫文と親交があることも知られている。広州嶺南大学孫逸仙博士医学院籌備委員会編『總理開始学

- 医与革命運動五十年紀念史略』嶺南大学、一九三五年。

- ⑫ William Easterly Ashton, *Questions and Answers on the Essentials of Obstetrics. Prepared Especially for Students of Medicine* (Philadelphia: W. B. Saunders, 1888).

- ⑬ 浩然、前掲論文。

- ⑭ メイン（David Duncan Main、梅騰更、一八五六～一九三四）は、杭州広済医局（Hangchow Hospital）の設立者。『西医産科心法』は彼と浙江慈溪出身の医者である劉廷植が教科書として訳したものである。

- ⑮ 唐容川『金匱要略浅注補正』自叙（趙洪鈞『近代中西医論争史』合肥、安徽科学技术出版社、一九九八年、六九頁より引用）。

- ⑯ 薛福成『出使日記統刻』巻十、「拙哉西醫。中國之良醫、亦能知人之數穴脈絡、而百無一失、然不必親驗諸死人、亦未嘗為此慘酷之事也。忍哉西人。」庸庵全集所収、『出使日記統刻』巻十、五十葉表裏。

- ⑰ ホブソンについては、詳しくは吉田寅「中国医療伝道とホブソンの中国医学書」（『幕末期医学書復刻』別冊付録、東京、教育出版センター、一九八六年）などを参照。

- ⑱ ホブソンは中国語を学び、中国医学に関心を持っていた。その一端は『全体新論』における中国古典の引用に表れており、『爾雅』『三才図絵』のような書物から、『素問』『難経』のような医学書にまで及び、中でも『素問』の引用は全体で数か所にも及んでいる。

- ⑲ 葉廷珪「林花盦詩」『滄喜齋叢書』、巻下、五三頁上。

- ⑳ 'A Short Report of the Hospital at Canton,' p. 3 ('The Eleventh Annual Reports of the Chinese Hospital at Shanghai, 1858, MS

5852.50. Morrison — Hobson Archive, Wellcome Library, London.)

- ²¹ 王韜の「英医合信氏伝」(『攷園文録外編』巻十一)に次のように記している。「合信避兵至上海、公餘之暇、著書自娛。時金陵管君小異方旅寄鄧尉、西士艾約瑟偶遊其地、一見悅之、載之至滬、偕合信繙譯各書」。

²² 『西医略論』序文にも「適江寧管茂材談論医学、因相与商榷、共成此書」とある。

²³ “The History and Present State of China,” *Medical Times & Gazette*, November 17, 1859, p. 478.

²⁴ 王韜は『瀛壖雜志』巻五で彼を「雅好岐黄術」、「頗能琢抉醫學源流」と記している。

²⁵ 現在では管茂材を「上海における中西医折衷論の第一人者」と称する学者もいる。熊月之『西学東漸与晚清社会』北京、中国人民出版社、二〇一一年修訂版、二一四頁。何小蓮『西医東漸与文化調適』上海、上海古籍出版社、二〇〇六年、二五七頁。

²⁶ 王韜『蘅華館日記』(『続修四庫全書』所収) 二二三頁。

²⁷ 陳万成・羅婉薇・鄺詠衡、前掲論文。

²⁸ 傅蘭雅『訳書事略』上海、格致彙編館、一八八〇年、九頁上。またカー(嘉約翰)口訳、莆田林湘東筆述『西薬略釈』所収の筆者林湘東「序」にも翻訳のプロセスが言及されている。

²⁹ “Chinese Works,” *Medical Times & Gazette*, May 28, 1859, p. 555.

³⁰ Francis Henry Ramsbotham (一八〇一—一八六八) はロンドン病院およびエジンバラ大学で医学教育を受け、一八二三年エジンバラ

大学を卒業。大著 *The Principles and Practice of Obstetric Medicine and Surgery* は、一八四一年に出版。

³¹ “The History and Present State of China,” *Medical Times & Gazette*, January 12, 1861, p. 35.

³² チャーチル(Fleetwood Churchill、一八〇八—一八七八)は、産科医および医療作家として知られる英国の医師。ノッティンガムに生まれ、ロンドン、ダブリン、パリ、エジンバラで学び、一八三一年に医学博士号を取得。 *On the Theory and Practice of Midwifery* の外に、産婦人科、小児科に関する著作が多数ある。

³³ 一八四三年版は五一九頁、図一一六枚、一八四八年版は五二五頁、図一二八枚、一八五一年版は五一〇頁、図一二九枚、一八六〇年の拡大版は六七八頁、図一九四枚に増えた。

³⁴ 鉗子は十七世紀後半に、ロンドンのチェンバレン一家が考案したとされる。その後頻繁に改良され、十八世紀後半にヨーロッパ大陸に普及した。十九世紀に入ると、産科医たちが器具の発明に熱意を注ぎ、ときに危険で無益であったが、独創的な器具を次々案出し、胎児と女性の体で実験した。ハロルド・スピアート著、石原力訳『図説産婦人科の歴史』東京、エンタプライズ、一九八二年、二七二—二七三頁。

³⁵ 会陰切開は、一七八〇年ある男産婆によって行われたのが最初と言われる。Ann Oakley, “Wisewoman and Medicine Man: Changes in the Management of Childbirth,” in A. Oakley and J. Mitchell eds., *The Rights and Wrongs of Women* (Harmondsworth: Penguin, 1976), p. 36.

二 『婦嬰新説』の内容と特徴

『婦嬰新説』は多くの図版を用い、管氏の妙筆と豊富な医学知識が加わって、以前の漢訳洋書は勿論のこと、『全体新論』よりも簡潔明瞭に仕上げられ、読みやすい物となった。また知見に富むところもあり、多くの論点は今でも通用する。しかし、当時の中国人にとって突飛なところが多く、異質なものであった。次はその内容と特徴を詳しく見る。

（一）『婦嬰新説』の目的

『婦嬰新説』は全一卷の構成であり、前半は産婦人科、後半は乳幼児に関する内容を扱っている。和刻本は便宜上、巻上・巻下に分けており、本稿はその三宅氏蔵板をテキストとし、引用は葉数のみ記す。内容目次は下記のとおりである。

総論子宮精珠 総論月経 月経病証 白帶証 論妊娠胚胎 論受胎証拠 弁孖胎法 総論男女之数 論男女不生育之故 論半產
論妊娠症 論分娩之期 論將產証拠 論臨產 論臨產時變症 論胎盤不出 論產後子宮斂縮 論產後腹痛血露 論產前後血崩証
論接生之法 論變產接生法 論產後症（以上が上巻） 論乳 論別母之乳 論小兒宜忌 論嬰兒初生 論小兒初生時病症 論生牙
換牙 麻証論 痘証論 水痘（附） 種痘論 選用方藥

「目次」の前に、『婦嬰新説』を撰述する目的を述べる序がある。些か長いが、全文を引用する価値がある。

去年、私は上海に来て、『西医略論』を著し、『全体新論』の不備なところを補い、たまたま割鋸之法に論じ及んだところ、江南の人は柔弱なため、奏刀の技を安易に試すべきではない、と言われた。私は、治療法は病によって講じられるもので、このような

病があればこのような方法を用いるべきだと言った。ここに、骨節が切断され、皮肉は皆壊れている人がいるとする。既に壊死した骨肉を割去せず、既に折れた脈管を綁繋せずして、どうして生きながらえることができようか。

江南の人は柔弱ではあるが、この方法を使わずにはほかの方法があるうか。故に西国の医療法を、中国で行うべきでないと言うのは確論ではない。況してや書には、刀法を論じるものは十にして僅かに一二だけで、方薬を論じるものは十に対して七八がある。唯外証に詳しく内証に簡略である。私は、更に中国の内科諸書を調べ、これらの書は大抵主張にぐらつきがあり確証は少なく、ヨーロッパ人の述べる所の精確詳細に及ばない。因って更に内証の治療法を記述して、以て華人に伝えようと思った。

日々、暇がなく、すべてをやり終えるいとまがないので、まずは婦人の経産及び嬰兒病証の論をとりあげて、合わせて一編として、『婦嬰新説』と名づけた。理論は真であり説明は平易である。また図説と方薬を全て揃えた。西医が助産を行う際、難産の症状に遭えば、往々にして各種の機器を用いるが、中国ではまだこれらについて学んだことがないのを恐れ、とりあえずこれらについては収録しないことにした。もし華人が妊娠出産の理や嬰兒の養育法について明らかにしようとすれば、この書は有益であろう。これを以って序とする。

咸豐八年歲次戊午仲夏日 合信氏仁濟医館にて記す。

この序文で、中国の内科諸書は抽象的過ぎて確証がなく、ヨーロッパの詳細精確に及ばない、と中国医学を批判し、西洋医学が先進的であるとの持論を展開しているほかに、目立つのは、半分近くの紙幅が、「江南の人」は体質が弱い故、「割鋸之法」「刀法」、つまり解剖と手術に適しないという考えに対する反論に当てられたことである。しかしホブソンは、反論をしながらも、『西医略論』には、西洋医学の長ずるところの「刀法」と内証を少なくし、また『婦嬰新説』には、中国人が未だに学習していないことを理由に「各種の器機」を訳さなかった。すでに確認したように『婦嬰新説』は「各種の器機」がなかっただけでなく、「刀法」に関する言及も以下の四か所に過ぎなかった。即ち、①「西国婦人、血が常

に余り有り、故に放血法がある」（上巻、四葉裏）、②子宮頸が狭く、或は子宮口が塞がれ、月経が出ない場合、「西国の医法は、塞ぐ処を刀で少し切る」（上巻、六葉表）、③「骨盤が歪んで、生み落とせない婦人に、西国に殺子救母の法があるが、大概危険だ」（上巻、三四葉表）、④出産時に会陰が裂開した場合、「西国に糸で縫合する方法があるが、中国ではできない」（上巻、三五葉裏）の四か所だった。しかもこれらの手術の中国への適用は慎重にすべきだと認め、どれも詳しく紹介しなかった。

ホブソンは解剖学や外科手術の先進性を疑わなかったが、臨床治療としての「刀法」については慎重な態度を示していたことが、この序文ではつきり読み取れる。「慎重」な理由は序文では中国人が勉強しておらず「各種の機器」を操作できるか心配だとしているが、本文では中国人の体質や手術自体のリスクなども考えているのが判る。『西医略論』には「刀法」を少なくしたものの、手術用の刀、針、ピンセット、フックなど図入りの説明があったことから、『婦嬰新説』で「刀法」を扱わなかった背景には、序文で言うように、中国人の「刀法」に対する批判への配慮があったと考えられる。当時の中国人の「洋教」「手術」への恐怖から流血事件に発展したこともしばしばあった。②③。ホブソンもこうした中国人の反感を当然知っていた。

（二）『婦嬰新説』の特徴

『婦嬰新説』の主な特徴は以下の三つを挙げることができる。

（１）最大の特徴は、図版、数字、統計の大量使用と具体的かつ平易な記述、文学的表現であろう。これはホブソンが批判している中国医書の大雑把さや抽象的な論法と対照である。

『婦嬰新説』には精緻な図版四一枚が付されている。その数は原著の一一六枚の三分の一にも満たないが、骨盤、子宮、胎盤、母体中の胎児の位置、特に難産時の胎児の位置と対処法などが含まれる。しかもそれらは女性の最も隠すべき場所

であるため、その写実的描写が、『全体新論』よりさらに強烈な印象を与える。図入りの説明と共に、精確な数字が随所に見られる。子宮、卵巣、輸卵管、胎盤、骨盤と児頭の大きさなどが、「尺、寸」まで細かく記されている。陣痛の間隔も「分」で示し、乳幼児の哺乳頻度と量は、西洋の計量・計数の単位を「戌亥時」や「両」、「斤」など、当時中国で使われていた単位に書き換える工夫をしている。特に子宮や卵巣、輸卵管などの説明が最も詳細である。例えば、子宮についてこう書かれている。

子宮は尻の骨盤の内、膀胱の後、直腸の前にある。底と頸と口が有る。上は大きく下は小さい。底は上にあり、口は下にある。底は幅一寸三分、長さ二寸、厚さ七分、口に繋がる者は、陰道（膣）という。陰道の口は戸と言ひ、また門ともいう。陰道は長さ約三寸半、幅八分、其の形はまっすぐではなく曲がつている。子宮の中空の処は房という。房は三角の形をして、角の一つは底の左にあり、一つは底の右にあり、一つは口にある。故に名づけて三角房という。房底の左右にそれぞれ一つの小さな孔が有り、非常に細く、僅に豚の毛が通るほどである。房底の外に左右それぞれ一つの管が有り、子管（卵管）という（総論子宮精珠）。

寸や分の単位まで示すだけでなく、詳細な位置や形状も説明し、卵管を「豚の毛」に例え、僅かに豚の毛が通るような細い孔である、と説明している。

また統計については、例えば、正常産と異常産を論じる際に、「西国に医士があり、接生二万五百十七回、頭が先に出る者は一万九千八百十、臀が先に出る者は三百七十二、足が先に出る者は、二百三十八、手が先に出る者は八十」とデータをを用い、しかも一医師のデータだけでなく、他の二人の医師の統計も、煩を厭わずそれぞれ詳しく列記している（上巻、二二葉表裏）。産前産後の不正出血である「血崩症」については、「西医の統計によると、妊婦六万八千九百八十二人中に、四百二十四人が血崩を患っており、これは三百二十五人に二人になる。四百四十三人中に、子が亡くなったのが一百九、

これは四人に一人になる」と比率まで算出している（上巻、二七葉表）。図版、精確詳細な数字や統計データは、科学的証拠と圧倒的権威を見せつけるものであり、計算可能の危機として認識されやすく、危機意識を喚起するのに広く用いられた。

もう一つ注目すべきところは、文学的描写である。『婦嬰新説』は「精珠」及び受胎について次のように描写している。

核内には泡があり、大きいばあいは緑豆ぐらい、小さいばあいは魚やエビの子ぐらいの大きさと、内側には清液を貯えている。

これが陰精（卵子）であり、精珠と名づけられている。多い場合は二十粒も持つ者もいるが、少ない場合はわずかに十粒ほどの者もいる。普通の人は、十五粒から十八粒が一般的である。男女が性交した時、男精が陰道から三角房に入り、三角房から子管に突き通っていき、子管の末端で子核を捉える。精珠はそれに感応して動き、破裂して、子管内に入り、男精と出会って胚を形成する。そして徐々に移動して三角房に入る。これが受胎である（総論子宮精珠）。

前述した「子宮」の描写と同様、鮮やかな筆致で、「精珠」を動態的に捉えている。まるで解剖学者が、カメラを回しながら、数字を用いて「精珠」の大小、形態、そして受精・受胎の過程を解説しているかのようなのである。受胎は中国の医学で考えられている神秘的な「陰陽」の気や血の凝結ではなく、数字で表し、顕微鏡で観察できるものであることを示したのである。緻密な理論と高度な医療技術・器具、精確なデータは近代実験医学の精髓であり、これに図版や管氏の妙筆が加わり、人々の注目を惹きつけたのである。

（2）子宮の「発見」と強調である。前述したように、解剖学的凝視と統計的解析は近代医学の典型的な特徴で、産婦人科においては、その凝視と解析の対象が殆ど子宮に集中している。『婦嬰新説』を通読すると、子宮が際立って目を引く

のが判る。例えば、第一章「総論子宮精珠」の冒頭はこう始まる。「人体の各部位にはそれぞれ功用があり、無駄な部位は一つもない。その功用の最も大きいものは三つある。物の精華を取り入れ、消化し運び、体を養うのが臓腑の功である。知覚し動き、外には事物を認識し、内には器官を主宰するのが脳の功である。子を産み子孫の繁衍をもたすのは、男子では外腎で、女子では子宮の功である」と。子宮を臓腑や脳と並べるほど重要だとしていることに先ず注目しよう。それに、(一)で見た子宮の解剖学的説明が続き、章の最後で「故に子宮の効用は甚大である。液を生み出して月水と成すのが第一、胚珠を宿するのが第二、男精を受けるのが第三、胞胎を孕育するのが第四「の効用」である。子宮精珠の効用を知れば、則ち生育の仕組みは了然になる」と子宮の機能をまとめ、この章を終えている。

また『婦嬰新説』の肝要な部分である分娩と後産についての記述も、終始子宮しか見ていないと言える。ホブソンは陣痛を子宮の規則的で自律的な収縮と捉え、その子宮の収縮力だけで十分に胎児を娩出することができるという。例えば失神した産婦や知覚が無くなった産婦でも分娩できる。故に「力は子宮にあり母にあらずと悟るべし(可悟力在子宮不在母)」と強調した(上巻、一二葉裏―二三葉表)。

胎盤の産出は後産の最重要プロセスで、出産の難関の一つとも言われている。「論胎盤不出」の一節も、「西国の治法」にかなりの紙幅を割き、子宮から胎盤を剝離させるには子宮の収縮が如何に重要であるかを詳述している。「論産後子宮収縮」の章では、更に胎児及び胎盤娩出後に子宮の収縮によって、止血されること、子宮内の汚血が押し出されること、胎児及び胎盤を娩出後に子宮がすぐ元の形に恢復すること、膣の収縮が速くなることを述べ、それを「子宮の四妙」と纏めている。

この分娩の全過程における子宮の働きについての説明は、チャーチル原著から訳したものである。しかし「可悟力の子宮不在母」はチャーチル原著にはなく、付け加えたものである。チャーチル原著の重点は、子宮の自律的な娩出力にあり、それを強調するためにホブソンが「生産之力全在子宮」、つまり「母の力」ではなく「子宮の力」だとわざわざ付け加え

たと思われる。この強調はよく考えると実に興味深い。これについての分析は第四節に譲る。

(3) 中国人に馴染みの薄い病理の説明、病気の診断及び治療法である。『婦嬰新説』は子宮の働きを科学的に解明し、その役割を強調しただけでなく、子宮は女性のあらゆる病気の源でもあると捉えている。月経や妊娠出産に関する病気は基本的に「子宮不安」「卵巢不安」「陰道不安」が原因だと診断され、その治療法は、基本的に瀉血療法、水節療法及び服薬療法の三つに尽きる。幾つかの例を見よう。

例えば、「月経病証」の章に月経に関する病状と治療法が羅列されている。月経が閉じられ出ない、かつ体が熱く感じる人は「瀉血発表」^⑤が宜しいと処方するが、すぐ後に「西国の婦人は血が常に余っており、故に放血法がある。中国では血が不足する者が多く、おそらく放血すべきではない」と続き、中国人と西洋人の体質の違いにより、瀉血法は適切ではないと付け加えたのである。にもかかわらずその後もなお瀉血法が薦められた。

また「経痛」の原因の一つは「子宮之腦氣筋」^⑥が不安定なことによるもので、「樟腦・鴉片酒を服用して痛みを止める」^⑦外に、「鴉片膏を尾骶骨に塗り、斑蝥椒樟水を両手で腰腹の周囲に塗って、以て腦氣筋を安定させる。下半身を温水に浸して子宮を潤し、鴉片及び温水を混ぜて水節に貯え、大腸内に射入する」と治療法を挙げている。さらに炎症による「身熱不安」及び生理痛は、「血が多いのが原因で、瀉血発表し、止痛の薬を数回服用し、常に涼潤の果物を食し、湯に足を浸す」と述べる（上巻、五葉裏〜六葉表）。因みに、この「常に涼潤の果物を食す」は、原文では「cooling drinks」だったが、『婦嬰新説』は原文を改訳したのである。「論臨産時変症」^⑧には、「分娩時に、力を使い過ぎたため、血が圧迫されて脳に流れ込む。治療法は中風痲症の治療法と同じで（詳しくは「西医略論」を見よ）、頸の後ろに斑蝥膏薬^⑨を塗り、耳の後ろを蟻に血を吸わせる。重度の者は氷塊を頭に置き、或いは凍水で頭を洗い、大黃や蓖麻油等の薬を内服して、以て血を瀉す」（上巻、二二葉裏〜二三葉表）と書いている。管茂材は勿論のこと、ホブソンも中国人にとって冷たい物が厳禁で

あることを知っているはずである。恐らくそのために、「須冷用〓冷たい物を用いるべし」とわざわざ説明し、さらに、「凍水」を使うのは子宮の収縮を刺激するためだと解釈を加えたのであろう（上巻、二七葉裏―二八葉表）。

『婦嬰新説』の投薬は、以上の引用からも判るように、痛み止めや炎症を抑える薬、鎮静剤などが中心である。薬物もアヘン酒、アヘン膏薬、罌粟（ケシ）、コカイン、樟脳などが殆どであった。このほか、栄養補給として、「雉哪鉄酒」（キナ酒）がよく用いられている。ヨーロッパでは長い間アヘン、コカインが万能薬だと信じられていたので、胎産にも当然のように用いられたのであろう。^⑩

瀉血治療については、刊行直前の原稿では詳しく書かれていたが、刊行本では削除され、代わりに「詳しくは『西医略論』を見よ」という注が加えられた。^⑪ 現在は殆ど使われていないこの荒っぽい瀉血治療法は、十九世紀半ばには内科の主要療法として大いに流行し、殆どすべての病気の治療に適用されていた。ホブソンは前の年に刊行された『西医略論』にその瀉血法を詳しく紹介していたが、『婦嬰新説』ではごく簡単な言及にとどめただけでなく、三つの方法の中で最も体に優しい、しかも刀針の要らない「蜚吮法〓蛭に血を吸わせる」を薦めた。その理由は、前述したホブソンの言う「中土則血不足者為多」にあると推測する。ただ、胎産書では「婦人は血を以って主とする（婦人以血為主）」の觀念が強く、血の放出に強い抵抗感があるため、それをホブソンも察知して削除した可能性も残る。つまり性別を意識していたとも考えられるのである。もう一つの水節療法は、冷水、凍水を臍に射入するもので、中国人にとってはまさに奇想天外にほかならない。^⑫

以上『婦嬰新説』の内容と特徴を見てきた。ホブソンは精確なデータを用い、分かりやすい文体で、女性の身体を解剖学的・統計学的に解析し、その機能と構造を究明し、特に生殖における子宮の役割を強調した。病症と治療法に関しては、中国人の体質と慣習を考慮し、「刀法」を全て削除し、瀉血法や「冷たい物」の使用の適合性にも気を配り、瀉血法の最も軽く刀針の要らない方法を用いた。しかし、子宮の収縮を刺激するために、「凍水」の必要性は主張し続けた。前述し

たように、ホブソンが中国に持ち込んだのは、一八五〇年代までのヨーロッパの最新の産婦人科知識である。では、このような知識は如何なる知識体系なのか、宣教医としてそれを如何に伝え、そして医学知識の外に何を伝えようとしたのだろうか。次節では、十九世紀半ばの西洋医学と身体観、ジェンダー観を念頭に置きながら、具体的に掘り下げてみたい。

- ① 『婦嬰新説』は二種の和刻本がある。一つは京都で安藤桂洲が安政六年（一八五九）に刊行したもの、一つは江戸で三宅良育が刊行し、万屋兵四郎が発売したもの。一八五九年の刊行と推定されている。本稿は後者をテキストとする。扉（原封面）に「咸豊八年新編」「江蘇上海仁濟醫院藏板」とあり、奥付に「桃樹園三宅氏藏板」「老皂館 東都江左萬屋兵四郎發行」とあり、四周双辺無界十行二四字、单魚尾、訓点付。

- ② 楊念群、前掲書、第一章、第二章。

- ③ 'A Short Report of the Hospital at Canton' (前掲) にも中国民衆の「敵意」が書かれている。因みに、ホブソンが広東の恵愛医館で行った手術の中で外傷や骨折などが最も多かった。

- ④ 「水節療法」は、「水治療法」の一種ではないかと考えられる。「水治療法」は一九世紀半ばに開発され、ヨーロッパとアメリカで大流行した治療法である。リディア・ケイン、ネイト・ビーダーセン著、福井久美子訳『世にも危険な医療の世界史』（文藝春秋、二〇一九年）「トンデモ医療」女性の健康編」及び第十六章を参照。

- ⑤ 「瀉血療法」は頻繁に出てくる治療法で、「瀉血」は血を抜くこと、「発表」は発汗・嘔吐・下痢などを通じて、病症を外に出すこと。

- ⑥ 「脳気筋」は nerve に対する訳語である。松本秀士「西医東漸をめぐる「筋」の概念と解剖学用語の変遷」『或問 WAKUMON』一七号、二〇〇九年、四九〜六一頁。

- ⑦ 斑蝥はハンミョウ科の甲虫で、漢方薬に使われる。斑蝥椒樟水はカ

ンタリド樟脳のこと。

- ⑧ 陳万成らは、胎産書を熟知する管茂材が、能動的に「cooling pillow」を「涼潤の果物」と改訳したと分析し、これを管茂材が中国医学に適合するように働いた例とした。その分析には一理ある。しかし、なぜ凍水を使った治療法を削除しなかったか、やはり謎が残る。

- ⑨ 斑蝥膏薬は、カンタリド樟脳、カンタリジンのことだと思われる。

- ⑩ アヘンは痛み止めと麻酔に確かに効果があったが、すぐ淘汰された。趙洪鈞はこれらの薬物の効用は殆どないと断定し、症状の軽減に少し役に立つが、根治にはならない、と認識し、胡成もこの時期の治療薬はむしろ漢方がはるかに優れているという。趙洪鈞、前掲書、二〇〜二二頁。胡成、前掲論文。

- ⑪ 『西医略論』を確認すると、瀉血法として「玻璃杯引血法」（ガラス製の小さな壺により血を吸い出す）、「臂凹放血法」（切開による瀉血）、「蜚蛭法」（蛭に血を吸わせる）の三つを挙げ、「蜚蛭法」について、「用蜚蛭数条、使吮其血、以代刀針、亦可。將蜚蛭放於玻璃杯内、以杯覆蓋腫處、任其噬吮」と説明している。『西医略論』巻上、九頁下〜十頁上。

- ⑫ 中国では普段でも冷たい物が最も忌避されるので、生理期間や妊娠期間、産後はなおさら厳禁である。姚毅「産後の養生「坐月子」——中国」松岡悦子・小浜正子編『世界の出産 儀礼から先端医療まで』（東京、勉誠出版、二〇一一年。因みに「氷袋」を用いた治療は、一九二〇年代になっても反対され、物議をかもしていた。趙洪鈞、前掲書、

三 身体、性別、道徳、宗教——ホブソンの医学世界

(一) 十九世紀半ばの西洋医学における身体観とジェンダー観

前節で見てきた『婦嬰新説』の特徴は、いずれも当時の中国人にとってかなり突飛な発想であるが、十八～十九世紀のヨーロッパでは常識である。生理学・解剖学・発生学の発達によって、身体の構造と機能が次第に明らかになるにつれ、十八世紀ごろから、男女の身体的相似性を強調する古いモデルに代って、男女の根本的な非相似性を強調する新しいモデルが一般の言説の中でも優勢となった。女は男と同じ睾丸を持っているのではなく、男にない子宮と卵巣を持つ存在であり、女体内に持つ卵子は、顕微鏡によって精液中に発見した精子とは大いに性質を異にするという考えが、次第に定着していった。大きくて栄養豊かだが、ひたすら受動的に待つ存在である卵子と、活発で能動的に卵子に働きかける精子、という生殖上の役割イメージが形成されていったのである。これは、男女は生殖上で平等であるが、女は受動的で家庭的存在だというジェンダー観の形成に寄与した。^①

一方、女の身体が、その細部まで生理学的・解剖学的に凝視され、統計学的に分析されるにつれ、子宮や卵巣の絶対的な重要性が強調されると同時に、不安定で故障を起こしやすく、女性の病気の巣であるとも認識されていった。妊娠のみならず女の存在にとって、子宮の重要性は十九世紀にかけてさらに高まり、子宮はその女性が妊娠しているか否かにかかわらず、女の全存在を支配する絶大な力を持つと考えられるようになる。子宮は「女という有機体の中で最大の、しかもおそらく最も重要な筋肉」であって、「脊髓とその特殊な興奮神経や反射運動神経」を通して、全身のすべての場所と繋がっており、全身の隅々を行き来して悪さをしていると考えられた。特に子宮はヒステリー、狂気などを引き起こし、そ

の治療法の一つとして、若干の圧がかかった水流で女性器を刺激する「水力打診器」が使われていたという。^③

（二）『婦嬰新説』の身体・道徳・宗教

『婦嬰新説』には中国人に適合するためになされた改変が幾つか見られるが、上述した十九世紀半ばのヨーロッパの産婦人科の最新知識と治療、そして男女の相似性を強調する身体観と照らし合わせると、『婦嬰新説』は基本的にそれをそのまま輸入したことが判る。子宮には、際立つて目を引き、人体において脳や臓器と並ぶほどの重要な位置が与えられたが、それと同時に、子宮が「病の巢」であり、女／男らしさを規定する重要な器官であることも「発見」された。また受胎については、精子と卵子が如何に結合するかが細部まで観察された。^④それだけでなく、『婦嬰新説』は図版や統計、データを用いた中立的、科学的記述のように見えるが、実は身体、性別、道徳、種族、宗教に関する記述が散りばめられ、そこから宣教医でもあるホブソンの医学世界が見える。

ホブソンは月経と気候の寒暖、人の体質が関連していることを深く信じている。ホブソンは「英国は寒冷の地に位置し、初潮は十三から十六歳に来る者が多い。インドは暑い地に位置し、十一歳に来る者が多い」と述べ、例を挙げて言う。「インドには十歳から十一歳くらいで、すでに子を産む婦人がある。命の消耗が早すぎて、三十歳前にもかかわらずすでに形態が老衰して、再び妊娠できなくなる運命になる。また北極の国には、四季とも寒いため、二十歳から二十四歳にや」と初潮を迎え、六十歳になってもなお子を産める婦人がいる」（上巻、三葉表裏）と。このように、初潮と閉経の年齢は地域の寒暖によって異なると述べた後、初潮が早いと、出産の年齢も早く、衰弱老化も早い。逆に寒冷の地では、六十歳になっても生命力が溢れ、子を産める身体になると言う。インドと北極の国（母国英国及び北欧を想定しているのだろうか）を対比している点も興味深く、当時の熱帯医療に根付いた、人種の優劣序列を連想させるものである。^⑤

男女の数について、ホブソンは、「男女の多少は、万国を合わせると、其の数は大概同じである。ヨーロッパの医師が

嘗て統計したが、その比率は男胎が百六に対し、女胎が百」（上巻、一五葉裏）と述べている。この男女比は今でも常識の範囲と言える。しかし、ホブソンは続けて言う。事実上、世界中の男女数は違い、女性が男性よりも多い。なぜならば、一つは、母体中で亡くなる胎児は男が女より多い、今一つは、男は働き苦勞し、危険な地に赴くことが女性より多く、命を落としやすい」からだ。さらに、ホブソンはここで突然話題を変え、「人の多少増減は、造化主の権能にして不可思議である。人は自分がどこから来たか、なぜ古今東西を問わず、形体に一人として同じ者が無いか、なぜ身体の功用はどのように奥妙なるかを考えるべきである。これは必ず主宰する者がある。どうして敬畏するのを知らないことがあろうか」と説教し始める。男女の数も造物主の不思議な力で決められ、男性は外で冒險するものと、ホブソンは慎み深く信じている。確かに『婦嬰新説』の宗教的色彩は彼の他の医学書に比べて薄い方ではあるが、『婦嬰新説』を通読すると、このような造物主への驚嘆と敬虔が至る所にちりばめられているのが容易に判る。前述した子宮の「精妙さ」についても、「造化の妙用は、真に不可思議である」と造物主を賛美し、また、陣痛が連続せず間隔を空けて来ることも「造化主の意志」で、産婦が激痛に堪えるためだ、とする（上巻、二〇葉裏）。

中国にやって来た他の宣教医と同様、ホブソンは科学的医学を論じているように見えるが、実際には至る所で神学的啓示が施され、伝教の使命を果たしているのである。それが「論男女不生育之故」でも露骨に展開されている。造物主は男女を問わず全ての「人」に平等な生殖の権能を与えており、子孫ができない者は必ず自身もしくは父母の行為に問題があったとしている。では「問題」とは何か？ ホブソンは男性について六つの悪い習慣、即ち「オナニー、早婚、節度のない性交、多妻、買春、鶏姦」を挙げる。これらの行為は、不妊を引き起こす可能性があるかもしれないが、それよりむしろ、当時のイギリスで考えられていた道徳的汚点だと言ったほうが正しい。男性不妊の生理的原因も挙げているが、それらの生理的原因は「大概淫欲の致す所であり、そうでなければ父母の淫欲の害毒を、胎児が感受したのである。ああ、一つの邪念、片時の縦欲は、或いは終身に累を及ぼし、或いは子女に害を及ぼす。人は、どうして痛省を知らずにいられよ

うか」とする。生理的病は不道德的な行為の結果だと説明し、それはさらに世代を超えて悪影響を与え、不妊という結果を齎すので、自らの日頃の行為を反省し、悔い改めるべきだと促したのである。

しかし、不思議なことに女性については、ホブソンは子宮や卵巣、膣に生じる様々な器質性病因を挙げ、あくまでも純粹な生理の角度から不妊を解釈している。ただしホブソンは、女性の行為の道徳性には言及しなかったものの、当時の新しい男女観モデルである近代家族的「一夫一婦の貞操観念を鼓吹していた。彼は続けてこう言う。「大抵一夫一妻で、互いに気を配って老いとともにすることは、人道の常である。房事に節度があれば、則ち終身強健になり、子孫は繁衍する。

此に反すれば則ち生殖に支障を来す。故に多妻の男子は、子孫を持つのが難しくなり、娼妓は稀にしか妊娠できない」と、多妻多妾の男性と並んで、性的にだらしない娼婦は妊娠しにくいと言って、一夫一婦制にとって脅威の存在である娼婦をやり玉に挙げたのである。

このように、身体的疾病がセクシュアリティや道徳性と結び付けて論じられ、身体の欠陥が道徳的欠陥に起因するとされた。これだけでなく、「男子の外腎と婦人の子宮は、その功用が相對して成立する。男子は外腎がないと、形状は婦人に近似する。婦人は子宮がないと、性情は頗る男子に類似する」と言う（上巻、一四葉表。ここでホブソンは、造物主は生殖のために、男女に平等に完璧な身体を与えたのだと再び強調する。前述した男女の相似性と共に成立した男女平等の表明と言えるが、しかし、男女それぞれ持つべきとされる生殖器官が欠損すれば、その本来の「性」も失うことになると言う。卵巣のない女性についてホブソンは、卵巣がないと月経がなく、子を産めず、そして「性情は人と異なり、概ね婦人の情がなくなり、治療法もない」（上巻、四葉裏）と説明する。つまり、子宮や卵巣は女性を女性たらしめる身体的所与で、それがないと、「婦人の情がなく、性情が男に似て」、やはり不完全だと言うのである。^⑦「婦人の情」とは何かを述べてはいないが、ヴィクトリア時代の貞淑順従、性的に無知な受動的女性にはかならない。

これがホブソンの医学世界である。ホブソンが中国に赴いた時、他の宣教医と同様に必ず直面する、「靈魂」と「肉体

「治療」の救済という問題への対応でもあったと言えよう。彼は中立的な医学論述の際に、身体、ジェンダー、道徳と神学を一体化させ、巧みにそして有機的に関連させたのである。^⑧

- ① トマス・ラカー著、高井宏子・細谷等訳『セックスの発明：性差の観念史と解剖学のアポリア』工作舎、一九九八年。荻野美穂『ジェンダー化される身体』東京、勁草書房、二〇〇二年、一五〇頁。

- ② Mary Poovey, "Scenes of an Indelicate Character": The Medical "Treatment" of Victorian Women, in Gallagher and Laqueur eds., *The Making of the Modern Body: Sexuality and Society in the Nineteenth Century* (Berkeley: University of California Press, 1987), p. 145.

- ③ グレイム・ドナルド著、花田知恵訳『図説偽科学・珍学説読本』東京、原書房、二〇一三年。この「水力打診器」と、先にみた「水節療法」との関連は明らかでないが、様々な医療道具が発明され、女性の身体を実験台としていたと言える。

- ④ 女性の身体への解剖学的・統計学的なまなざしは、二十世紀初頭に

四 「生殖」をめぐるジェンダーと身体政治

(一) ホブソンの医学と身体政治

これまで『婦嬰新説』の翻訳、特徴、そして医学世界を見てきた。『婦嬰新説』は医学知識のみならず、十九世紀半ばのヨーロッパの身体観とジェンダー観も内包し、さらに、『全体新論』ほどではないにしろ宗教的色彩を色濃く帯びていた。ホブソンの活動した時期は、ちょうど第一次及び第二次アヘン戦争の時期であり、通商拡大と共に伝教と医学活動が

中国でも広く受け入れられていた。姚毅「中国医学における医療・身体とジェンダー」小浜正子・下倉渉・佐々木愛・高嶋航・江上幸子編『中国ジェンダー史研究入門』京都大学出版会、二〇一八年。

- ⑤ 『全体新論』『月水論』には、インドでわずか八歳で出産した例が挙げられている。

- ⑥ デイヴィッド・アーノルド著、見市雅俊訳『身体の植民地化——19世紀インドの国家医療と流行病』みすず書房、二〇一九年。

- ⑦ 『全体新論』の「外腎経」にも、男の睾丸が去勢されると「音容頓改」と書かれている。

- ⑧ 人体の精妙な仕組みも、神がある目的に合わせて作ったものだとはホブソンが深く信じているが、しかしそれを中国人に受け入れさせるために、世俗的医学を道具として利用した。これが一八三八年に成立した中国医療伝道会の目的でもある。詳細は吉田、前掲論文。

「保護」され、それらの権益は第二次アヘン戦争後さらに天津・北京まで拡大していた。彼の身体観、ジェンダー観、道徳観の正統性は、医学的権威と絶対的存在であるキリスト教に裏打ちされ、揺るぎないものとなった。来華した他の宣教師と同様、ホブソンの最終の目的はキリスト教の理想と西洋文明の基準で中国社会を改造することにある。慈善の性格を持つ西洋医学はこうした帝国主義の拡張の根拠であり、道具であった。^①特に産婦人科を含む外科（特に眼科、腫瘍の切除など）がその即効性や具体的に目で確かめることができることから、西洋医学を推進する突破口とされていた。^②しかし、当時の中国は、医療器具やこれを用いた「刀法」に強い抵抗があっただけでなく、分娩は産婆や産婦の周りの女性のみの領域とされ、中国人男性医者さへ入り込む余地がなかった。西洋人男性が関与するのはなおさら難しかった。つまり、西洋産婦人科は中国に導入される際に、文化とジェンダーという二重の厚い壁にぶつかったのである。それを突破するため、欧米の女性宣教師を中国に呼び寄せたり、中国人女性医師を養成したり、またジェンダー規範の緩い下層の民衆に無料の助産を施したりと、様々な戦略を講じてきた。^③これと同時に産婆の無知やこれらの無知な産婆を野放しにした医者者の責任を糾弾し、学校で正式な医学教育を受けた医師にのみ治療資格を与えるべきだと主張した。このような産婆批判と医学教育の主張は、管見の限り、ホブソンによるものが最も早い部類に属する。^④『全体新論』の「胎論」に「西洋の国では助産のことは皆医師が主導し、…中国では専ら狡猾な老婆愚婦が為されている」とあり、中国では分娩が全て産婆の手に委ねられているのを問題にし、出産領域の専門化を提唱している。^⑤欧米では出産領域の専門化は男性医師の出産領域への進出を意味し、医師が男性、助産師が女性というジェンダー役割を形成するきっかけであったが、先述したように中国では戦略的に女性医師を養成し活用していた。女性医師の活用は、中国ジェンダー秩序への妥協と譲歩であるが、同時に西洋医療界における男性独占的なジェンダー秩序を変化させるものでもあって、複雑な身体政治であった。^⑥

ホブソンが『婦嬰新説』を翻訳する際に、医療器具や「刀法」を紹介しなかったのは、中国文化に対する妥協に見えるが、それはあくまでも伝教と西洋医学の推進、また西洋と中国の優劣の差を示すためであって、広い意味での身体政治と

言える。^⑦『婦嬰新説』はこうした文明の覇権をめぐる身体政治から読むべきであろう。では、このような『婦嬰新説』は、中国に如何に受け止められただろうか。

(二) 『婦嬰新説』の受容

『婦嬰新説』の発行部数は不明だが、『全体新論』の初版は一二〇〇部と言われる。王韜は日記で、『全体新論』刊行後、「遠近翕然としてこれを称賛し、購買者は重価を憚らなかつた」とし、また、ホブソンが亡くなった後の「英医合信氏伝」では、「其の著する五書は、今已に海内に風行している」と称賛している。^⑧このことから、『全体新論』が広く読まれていたのは確かである。しかし実際には、産婦人科著作として『婦嬰新説』だけでなく『全体新論』も、刊行後少なくとも二十数年の間、それほど「衝撃」的なものと受け止められてはいなかつた。『全体新論』刊行後の翌一八五二年、それが海山仙館叢書に収録される際に、海山仙館主人潘仕成による長い序文「全体新論弁語」が付され、『全体新論』の解剖及び受胎論について非常に興味深い見解が示された。^⑨この序文は、まずホブソンの解剖図は宋の王惟徳の「銅人図」^⑩に似ていること、また中国の古典書籍の記述も解剖による知見であると認め、それなのにどうして「西医の剖視が根拠あり、中国の剖視が根拠不足」と言えるのか、とホブソンの中国医学批判に反論する。そしてホブソンの自称する「新論」は「全て知見がないとは必ずしも言えない」と、ある程度評価するも、中国古典の『靈樞』『素問』とは異なるもので、「偏隅の学、一家の言」としか言えないと貶める。さらに、受精受胎については次のように問題視した。

その精血がどこからきてどこへ到達し、胚胎がいつどのような状態になるかの議論などは、どうして死体を解剖することで、それらの動きやタイミングが考察できるといふことがあるうか。これはすべてことさらに異説をたてているもので、その所説は妥当ではない。ただ著者は中国の書籍が読め、正しい解釈が記された字を識っている人であるので、すべてが荒唐無稽だというわけ

はないようである。著者側は当て推量をいつているだけとはいえ、我々のほうとしてもとりあえず聴いて差し支えない。

上からの目線でホブソン説が「妥当ではない」と断定しているものの、西医に対する前向きな姿勢や寛容性も窺える。ここで重要なのは、既に死んだ人を解剖して、何時どのように受精・受胎したかを考察することがどうしてできようか、と疑問を呈し、受胎は解剖で解明できるものではないとの考えをはっきり示したことだ。これは恐らく当時の中国人の一般的反応と言える。ホブソン医学書の影響を受けたと言われている石寿棠は『医原』（一八六二）の「女科論」で、「西医云」としてホブソンの受胎論を詳しく引用したが、「この説は元台の説と同じだから、信賴できるようだ」と述べ、直ちにホブソンを信用しなかった。そればかりか、石は終始胎産書の文脈に沿って論を展開しており、ホブソンの影響を受けた形跡は全く見られない。またホブソンと親しかった王韜も、『婦嬰新説』にある「難産治療法は必ず中医の不足を補うだろう」と客観的に評しただけだった。

『婦嬰新説』をはじめとする西洋産婦人科知識に対する激しい反論は、十九世紀末から二十世紀初頭になってから頻繁に見られるようになる。^⑬その背景として、前述した戦略の外に、宣教医が医療器具及び手術を出産現場に取り入れたこと、西洋医学が排他的優位性を確立して中国医学への攻撃を強め、中国の秩序がよって立つ基盤そのものの転換を迫ったことなどが挙げられる。一八六〇年にカーが中国初の難産時の「碎胎術」（ホブソンの言う「殺子救母」）を行い、一八六六年にピンセットを使って胎児を取り出す手術を行った。僅か数例しかなく、しかも下層民衆を対象とした、こうした手術が徐々に増えていき、十九世紀後半から、麻酔や消毒技術の発達、外科手術の進歩につれ、帝王切開術も行われるようになった。特に帝王切開術は難産解決の最高の手段とされ、西洋産婦人科学の優越性を示すシンボルとなった。

こうした西医優位論に真っ向から反論する知識人が多くいた。たとえば西洋では、「紅腫くらいですぐ麻酔薬を飲ませ、メスでその毒肉を切除する。甚だしきにいたっては、婦女の子宮さえ切開法が用いられ、しかもそれが西洋産婦人科の真

髓とされている」と嘆き、切開法を批判した。さらに「中医は、虚弱の人に針灸を施す時さえも気の漏れを恐れているのに、肚腹を切開しては正気を傷つけずに済むであろうか¹⁵⁾」と切開法が賢明でない理由が述べられている。また臨床経験が豊富な医者である許克勤は、「婦人が妊娠しても産み落とすことができない場合、西国では子を犠牲にして母を救う方法がある」と『婦嬰新説』を引用し、「蘇城にいた陸という老婆は、この治療に長けていた。子の肉を一切れ一切れ切り取っても産母は痛みを感じず、その効は明らかで、人の耳目の知るところである。これは我（『中国』）に及ばないものの四つ目である¹⁶⁾」、と述べ、中国の産婆術が切開法より優れていると説いた。

(三) 胎産書における子宮と受胎

ではなぜ刊行当初、それほど「衝撃的」と受け止められなかったのだろうか。『婦嬰新説』の列挙する病症と治療法は当時の中国のそれにはるかに及ばないこと、「刀法」は当時の中国でまだ殆ど使われなかったこと、ホブソンの中国批判はそれほど脅威に感じられなかったことなどが考えられるが、より根本的には、『全体新論』も『婦嬰新説』も潘仕成の言うような当て推量、根拠のないもので、胎産書のほうが信頼できるとの認識にあったと考えたほうが妥当であろう。

子宮は古くから「胞」「胞宮」「女子胞」などの名称で呼ばれ、月経・妊娠を司る、と認識されていた¹⁷⁾。「子宮」の形状と位置及び機能について明代の著名な産婦人科医朱震亨（一二八一～一三五八）が、その『格致余論』（一三四七）で論じていた。その後、例えば明代の張介賓（一五六三～一六四〇）のように、子宮の正確な位置と機能について論じる医者が多く出た¹⁸⁾。しかし、多くの研究者が指摘したように、中国の胎産書に子宮への言及は増えたものの限定されており、また、機能を認識したとしても正確にどこに位置しているかという構造には無関心であった²⁰⁾。このことは、一八三〇年に書かれた張曜孫の『産孕集』から確認できる²¹⁾。

著者の張曜孫（一八〇八～一八六三）は、官僚であるが詩文の執筆や医療活動にも従事し、特に代々伝承の産婦人科に長

けていた。²²⁾『産孕集』は、ホブソンと同時代に活躍した儒学者の医学著作の代表と見てよい。『産孕集』上篇「弁孕第一」のはじめに、受胎について次のように書いている。

二氣がたがいに感応し、合して靈妙な働き（神）が生まれる。男女の両精がたがいを探し捉え、聚まって形を成す。陽は奇として施し、陰は偶として承ける。陽は施して動き、陰は承けて動く。静になれば陽は凝固し、動けば陰は摂取する、動と静とが互いにその根源となり、形と神とがこもこもよりどころになって、妊娠が成立する。

これに続き、「易曰く」と『易』を引用しながら、「人」の形成だけでなく、天地万物の生成原理や宇宙原理を延々と説き、受胎や胎発生の経過に関する記述に、「子宮」や「女胞」など具体的器官や場所を指す語が一つも見当たらない。さらに、胎発生の経過について、「養孕第二」に二か所の記述がある。下にその一か所の一部だけを紹介する。

一か月は露珠のごとし。太極あり、陰陽未だ判ぜざるなり。二か月は花葉のごとし。太極両儀を生ず。三か月から五か月までは形体具わり四肢なる。両儀は四象を生ず。

抽象的で掴みようがないが、男女の生殖液である「精氣」が結合して新たな個体の生命を生み出す、と理解していたこと、また胎児が発達していく様子や大きさが観察に基づき記されていたことが確認できる。しかし同時に、それは単なる精子と卵子の結合ではなく、胎児の成長も胎発生学的でなく、天地陰陽の氣を受けて受胎し成長すると捉え、個体と宇宙を有機的に連結させて象徴的に表現したのである。つまり、受胎や胎児の成長は精子と卵子だけで語れるものでなければ、顕微鏡で観察し解剖学的に認知できるものでもない、と認識していた。こうして形成した身体は、より高次元の宇宙原理、

道徳に繋がり、分解不可のものとなった。その分解不可の完全性・曖昧性・不可視性こそ高い象徴的価値を持ち、より深い意味を持つと信じられていたのである。

しかし、これは医者が母子の生命を軽視していることを意味しない。張曜孫もほかの医者も産婆が技術を濫りに用い、母体内で死んだ胎児を碎いて取り出す（『婦嬰新説』の言う「殺子救母」）のを「殺人」と批判し、よりリスクの少ない根本的な治療法を求め、それを通じて出産領域の主導権を保とうとした。²³その根本的な方法とは薬草を使って不均衡になっている身体のバランスを取り戻し、出産の際に自然の摂理に従う自然無為の出産観である。²⁴そこで特に重視したのは、出産のタイミングである。明清時代の胎産書は、「子宮の収縮力」の原理を知らず、それを簡単に「母力」或は「母と子の力」と見做し、母の娩出するタイミングの重要性を繰り返して強調した。その「力」は「瓜熟蒂落」（瓜は熟せばへたから落ちる）に例えられ、分娩の時期が来れば自然に生まれるような「自然な力」である。²⁵また、胎産書では分娩を「母と子」の「力合わせ」と捉えていることにも注意すべきである。明代の産婦人科医である王肯堂は「凡そ産母が力を使う際に、子が降りて来るのを待たなければならない。出口に迫って来た時に始めて力を使つて子を送り出すのである。これが産母の正しい力の使い方だ」²⁶と説き、清代に最も広く読まれた『達生編』も「児は自ら回転することができ、必ず其の回転を待つべきで、力を使う必要がないだけでなく、正に力を使うのを忌み嫌うのだ」²⁷と力説していた。

ここから分かるように、胎産書は「科学的」な説明がなかったものの、分娩の仕組み、強いて言えば子宮の機能を知っていた。こうした認識には「母」が受動的に子宮の収縮力だけに頼るのではなく、主体的にコントロールする側面、また「母」も「子」も意思を持つ有機的生命体と捉えている側面が含まれる。これが子宮という一器官のみを重視する西洋産婦人科との最大の違いでもある。第二章第二節で、ホブソンがわざわざチャール原著にない「可悟力（子宮不在母）」を付け加え、「子宮」の科学的原理と仕組みを中国人に分からせ、中国の誤りを訂正しようとしたのを見たが、こうしてみると、中国医学に詳しいと見られていたホブソンが中国医学の神髄を理解していなかった、或は理解しようとしたと

言われても仕方がない。子宮や胎児形成の捉え方は、中西医学の違いを端的に表していると言っても過言ではない。²⁸これは『婦嬰新説』が刊行後に長い間に中国に受け入れられなかった根源的な理由と思われる。

- ① 李尚仁、前掲論文、五二七―五七二頁。
- ② 西洋医学の臨床における主な長所は、外科及び外科に関連する眼科、産婦人科だけだった。例えば白内障手術、腫瘍の切除、外傷の止血・縫合などはすぐに効果が見られ、中国人の信頼を得るため、宣教医によって戦略的に推進された。姚毅『近代中国の出産と国家・社会』東京、研文出版、二〇一一年、第二章。
- ③ 周東華は杭州広済医院を例に、病院が戦略的に如何に女性患者を取り込んだかを詳細に考察した。周東華「去医院就洋医：清末杭州広済医院の女患者及其医療場景」『世界宗教研究』二〇一四年四期。
- ④ 早期に來華したパーカー（Peter Parker、伯駕、一八〇四―一八八八）、ロックハート（William Lockhart、雒魏林、一八一―一八九六）及びカーを含む宣教医が度々「中国の産科は完全に女性に主導された」と嘆くこと。William Lockhart, *The Medical Missionary in China: A Narrative of Twenty Years' Experience* (London: Hurst and Blackett, 1861), p. 160. 『西医略論』の「中西医学論」は、中医が西医に遅れた原因として、医師免許制がないことと解剖が行われていないことを挙げていた。
- ⑤ 『全体新論』の「胎論」に「西国接生之事、皆以医士主之：中国之用穩婆、而固取狡嫗愚婦為也」。ホブソンの患者には下層の女性もいたが、出産に関わる女性がいなかった。姜鍾赫、前掲論文、五〇頁。
- ⑥ 王秀雲「不就男医：清末民初の伝道医学中の性別身体政治」『中央研究院近代史研究所集刊』五九期、二〇〇八年。姚毅『近代中国における助産領域の専門職化とジェンダー』『中国—社会と文化』一二五号、二〇一〇年七月、一六〇―一七七頁。姚毅、前掲書、第二章、第三章。
- ⑦ 李尚仁が『婦嬰新説』の主目的は西洋の内科と薬が中国より優れていることを証明することにあつたと主張している。李尚仁、前掲論文。
- ⑧ 方行、湯志鈞整理『王韜日記』北京、中華書局、一九八七年、一一頁。王韜『張園文録外編』上海、上海書店出版社、二〇〇二年、二七八―二七八頁。
- ⑨ ちなみに、『全体新論』が海山仙館叢書の一冊として収録される際、キリスト教を説く「靈魂妙用論」が削除された。
- ⑩ 王惟徳は宋代の医者で、「銅人図」は彼が鑄造した銅製の人形である。
- ⑪ 石寿棠撰、王新華点注『医原』南京、江蘇科学技术出版社、一九八三年、一五六頁。なお文中の「元台」は、馬元台のことで、明代の医者馬蒔である。
- ⑫ 王韜・顧燮光「ほか」編『泰西著述考』。王韜は『瀛海雜志』巻五でホブソンの人柄と学識を褒めたうえで、その著書は既に「風行海外」と記しているが、『婦嬰新説』に特に言及しなかった。
- ⑬ 詳細は姚毅、前掲書、七八―八二頁を参照。
- ⑭ 來華した宣教医の目的は中国の古い秩序を打倒し、キリスト教の理想と西洋文明の基準で中国社会を改造することにある。李尚仁、前掲論文、五二八頁。周東華、前掲論文。
- ⑮ 「中西医理優劣論」（邵之棠輯『皇朝經世文統編』九十九卷、上海寶善齋石印本、一九〇一年、九―十頁）。
- ⑯ 許克勤「泰西医学源流」（陳忠倚輯『皇朝經世文三編』上海書局石印本、一九〇二年（初版は一八九八年））。

①⑦ 子宮の名は、『神農本草經』紫石英の「女子風寒在子宮、絕孕十年無子」条に初めて見られる。

①⑧ 朱震亨著、劉更生点校『格致余論』天津、天津科学技术出版社、二〇〇〇年、二五―二六頁。

①⑨ 張介賓『類經』藏象類、「奇恒臟腑藏瀉不同」に「女子之胞、子宮是也。亦以出納精氣而成胎孕者為奇」とある。

②⑩ Charlotte Firth, *A Flourishing Yin: Gender in China's Medical History, 960-1665* (Berkeley: University of California Press, 1999).
Wu, Yi-Li, *Reproducing Women: Medicine, Metaphor, and Childbirth in Late Imperial China* (Berkeley: University of California Press, 2010). 姚毅「中国医学における医療・身体とジェンダー」四〇三―四〇六頁。

②⑪ 『産孕集』は一八三〇年に書かれたものであるが、様々な刻版が流通していた。本稿は『産宝』『産孕集』『保童秘要』（第二軍医大学出版社、二〇〇六年）に収録されている光緒二十四年（一八九八）の刊行本を使用する。

おわりに

『婦嬰新説』は中国初の西洋産婦人科専門書であり、その重要性和意味が認識されていたにもかかわらず、本格的に研究されてこなかった。本稿は『婦嬰新説』の撰述過程と内容を中心に、『婦嬰新説』は何を如何に伝え、如何なる知識体系を構築し、当時の中国に如何に受けとめられたかに焦点を当てて検討した。

『婦嬰新説』はチャールズの *On the Theory and Practice of Midwifery* を中心に、当時の名著を取捨選択して撰述されたが、鉗子、針など先進的医療器具を紹介する文字も図版も、そして「器官」や「細胞組織」などの術語も全て省かれ

②② 張曜孫は交友関係が広く、朝鮮の知識人とも頻繁に交流があった。

孫衛國「清道咸期中朝学人之交誼——以張曜孫与李尚迪之交往為中心」『南開學報（哲学社会科学版）』二〇一四年五期、九五―一三頁。
②③ これを出産領域における産婆との主導権争いと捉えるのが一般的である。Wu, *op. cit.*, 姚毅、前掲書、第一章、第二章。

②④ 明清時代、出産は特殊の病氣と見なされなかった。男性医者は出産現場に介入せず、あくまで「氣」「血」など理論上で身体を論じ、よりよい出産を求めた。このような動きは、同時期のヨーロッパとは大きく異なる。姚毅「中国医学における医療・身体とジェンダー」、四〇三―四〇六頁を参照。

②⑤ 姚毅、前掲書、第一章。

②⑥ 王肯堂『胤産全書』（『続修四庫全書』所収）卷三、三七七頁。

②⑦ 亟齋居士『達生編』、一七一五年。

②⑧ 陳万成らは、この一文は管茂材の意思で加えたとしているが、子宮の収縮原理を知り、それを強調したいホブソンの意思で付け加えたと考えるほうが妥当であろう。

た。また原文にない「力在子宮不在母」の強調や、cooling drinks の「涼潤果物」への改訳、さらに「冷水」を用いる治療法や瀉血療法に見られる中国人の体質や慣習への配慮などから、知識の翻訳生産によく見られる文化的適合・交渉が『婦嬰新説』の翻訳過程にも確認できた。しかし、中国の医学書を渉猟し、中国に親和的と見られていたホブソンが、実際には中国の医学を理解していなかったか、理解しようとしなかったことも確認した^①。ホブソンは、身体器官の位置が分からないと病原を突き止められない、当然治療もできない、とする解剖学に基づく西洋医学を深く信じ、胎産書のすべてを否定したのである。

『婦嬰新説』は大量の図版、数字、統計を用いて、妊娠出産の仕組み及び出産時の対応を具体的に説明する医学知識のみならず、十九世紀半ばのヨーロッパの身体観とジェンダー観も内包し、宗教的色彩も色濃く帯びていた。つまり中立的な医学論述の際に、身体、ジェンダー、道徳と神学とを一体化させ、巧みに、そして有機的に関連させたのである。この身体観、ジェンダー観、道徳観の正統性は、医学的権威と絶対的存在であるキリスト教に裏打ちされ、揺るぎないものとなった。『婦嬰新説』では、子宮が人体において脳と臓腑と並ぶほど重要だが、同時に「病の巣」であり、女／男らしさを規定する器官でもあったと認識していた。また受胎については、精子と卵子が如何に結合するかが観察された。こうした子宮へのまなざしや受胎観及び身体観は、中国とは根底から異なる。

ホブソン医学五書の中国に対する衝撃は常に強調されてきたが、『婦嬰新説』は刊行後少なくとも二十数年の間、それほど「衝撃」的なものと受け止められていなかった。その原因は、『婦嬰新説』に見られる病症と治療法が当時の中国のそれにはるかに及ばないこと、ホブソンの中国批判がそれほど脅威に感じられなかったことなどが考えられるが、より根本的には、宇宙道徳観と一体化した胎産書の奥深さに、『婦嬰新説』が及ばないと認識されていたと考えたほうが妥当であろう。産婦人科は他の医療分野と異なり、「刀法」を嫌う文化からもジェンダー規範からも、中国に受け入れ難いものだった。そのため宣教医は様々な戦略を講じてきた。ジェンダー戦略はその一つである。ホブソンの翻訳戦略も広い意味

での文明の覇権をめぐる身体政治と言える。

① 吉田は、ホブソンが中国医学書を熟読し、『皇帝内経』など伝統的医学を引用したなどから、「中国医学を尊重しつつ、西洋の近代医学を導入しようとする立場をとっており」（吉田、前掲論文、八〇頁）

と評価しているが、実際にはこれらの引用は、尊重ではなく、『皇帝内経』や『難経』などの記載を正すものだった。

（東京大学非常勤講師）

Knowledge Translation, Production, and Body Politics:
Focusing on China's First Western Obstetrics and
Gynecology Treatise *Fuying Xinshuo*

by

YAO Yi

This article focuses on *Fuying Xinshuo*, one of British missionary doctor Hobson's "Five Kinds of Western Medicine Books", and the first book on Western obstetrics and gynecology published in Chinese. The article examines, from a gender perspective, what knowledge was included, how that body of knowledge was constructed, and how it was accepted in China at that time. In recent years there have been many studies on the transmission and acceptance of Western medicine in China. Those studies have considered questions including the impact of traditional Western medicine and the response of Chinese intellectuals, the process in which knowledge was translated and produced, and the social world that shaped

negotiations and adaptation of that knowledge. We have also seen an increase in studies analyzing the views of the body reflected in Chinese-Western medicine. This paper builds on those perspectives, considering the translation and promotion of *Fuying Xinshuo* within the discourses on the body politics linked to questions of civilizational hegemony. This paper first found that *Fuying Xinshuo* did not include sections on medical equipment and surgery, which are usually considered to be elements of advanced practice in Western medicine; these were presumably excluded since they were thought to be incompatible with the constitution and customs of the Chinese people. In addition to medical knowledge, *Fuying Xinshuo* also includes content describing modern Western views on the body, gender, morality, and theology, using as illustration factual material including plates, statistics, and other data. Explanations organically link ideas of the body, gender, morals, and theology. This article argues that while there has been much discussion of the dramatic impact of the Hobson's "Five Kinds of Western Medicine Books" on Chinese medicine, at least for the first twenty years after its publication *Fuying Xinshuo* had little impact. The main reason for this was that Western obstetrics and gynecology, unlike other medical fields, were not accepted in China because of a cultural aversion to surgical operations and gender norms.

Key Words; *Fuying Xinshuo*, Benjamin Hobson, history of medicine,
body politics, gender